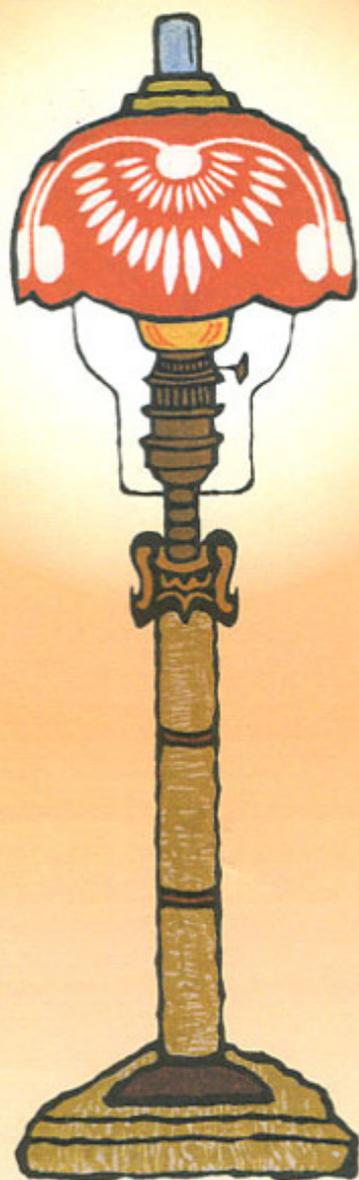


平成26年11月1日発行 春燈/第69巻第11号(毎月1回1日発行) 昭和21年7月22日第3種郵便物認可



春燈

11 月号

November 2014

主宰の句

安立公彦

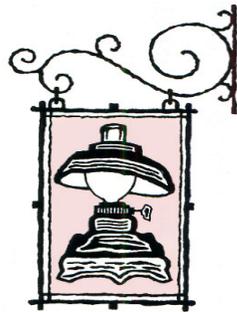
迢空忌真葛は色をひそめ咲く

待宵や刻をひとつに喜寿傘寿

幾人の歌びと詠みし今日の月

望の潮ひとすぢ写す灯台光

故郷や汽水に太る沙魚の群れ



久保田万太郎の句

涼しき灯すゞしけれども哀しき灯

『草の丈』昭和二十年

前書に「八月二十日、燈火管制解除」とある。五月二十四日早曉の上空襲に家を焼かれ、立ち退き先でも空襲警報に怯える毎日であった。ようやく終戦になり、まづ明かりが家の外に洩れぬように電灯を覆っていた黒い布を外した時の思いが「哀しき灯」に凝縮されている。戦後の東京は荒れ果てて暮しはますます厳しさが増し、十一月には、住み慣れた東京を捨て鎌倉に移り住む。

佐藤 信子

久保田万太郎の句

たましひの抜けしとはこれ、寒さかな

「春燈」昭和三十八年

「一子の死をめぐりて」と前書のある、絶唱ともいえる句である。万太郎は最初の夫人に死なれ、一人息子を亡くし、幸せとは程遠いものであった。また同棲していた最愛の三隅一子までが昭和三十七年十二月に亡くなってしまった。「たましひの抜けしとはこれ、」の読点に万太郎の茫然自失の心の内が伝わってくる。

万太郎も翌年五月、一子の後を追うように急死した。

田嶋洋子

燈下集

○ 青柳雅子

瑕瑾なき空の青さや敗戦日
盆の月生家の跡の駐車場
十歳は若くみらるる生身魂
四阿で待つてをります秋蛭
白蓮の歌集ひもとく星月夜

○ 木多芙蓉子

久々に「お帰り」と子に虹二重
透明感百の夫なり盆の月
茶を立つや盆の真昼間たれも来ず
白芙蓉父は横顔ばかり見す
シャッターチャンス笑壺くづさぬ生身魂

○ 西山浅彦

なにもかもさらつて行きぬ秋出水
処暑の日に乾ききつたる竹のざる
せつかくのかなかな聴くも一度きり
八朔や待ちあきし医の窓に雲
ただひとり花野の端を通りけり



○ 佐橋敏子

ロボットの律義な言葉秋暑し
少し疲れ少し元氣や休暇果つ
あの顔もこの顔もぬて栗の飯
思ひ出は草に残して蛇穴に
鳥渡る日記に誌す一行詩

○ 小張志げ

新涼やワインのコルク抜ける音

白日に黒白晒す敗戦日

朝市の葉先鋭き新生姜

いとど跳ぶ土間なき暮し半世紀

仲秋の月傾けて清洲橋

○ 江草 礼

足袋跣足地をなぞりゆく阿波踊

線香花火指の震へに星ふやす

足首に疲れのたまる休暇明

せかさるる事の多さよ夜半の月

路地裏の足じやんけんや鱚雲

○ 見田 英子

あかときや日光きすげ開く音

大粒の雨を喜ぶ夏の蝌蚪

一里塚へくそかづらに隠れけり

青梅をたたき落として雹去りぬ

牛の眼も野牡丹も濡れ雨季長し

○ 長谷川友子

さるすべり波郷知的な笑み浮かべ

夕風や重さうに揺れ実南天

秋の窓途切れ途切れに応援歌

りんご剥きふと父のこと母のこと

夫呼べど夜毎小さき虫の声

○ 白杵 游児

銀漢や流人の島の能舞台

厄日前フランスパンのついで買ひ

逆縁の形見分けとは盆の月

離島航路デツキに憩ふ秋茜

曾遊の山々近し葡萄狩

○ 岩永はるみ

新涼や乗換駅の山の風

朝夕の風変はりけり草の花

夕ぐれの土掘り返す小鳥の死

穴惑なさねばならぬこと数ふ

絵日記の最後の頁赤蜻蛉

当月集

安立 公彦選



○ 中村紀美子

山里のしづかな昼餉青なつめ

人恋ひの夕べ咲き初む白粉花

万葉の道の切り岸葛の花

左千夫碑や波音高き秋の海

初潮や神田川出る屋形船

○ 藤丸誠旨

蚯蚓鳴く心の襷を洗ふべし

呼気量の少なさ嘆く秋の蟬

コスモスの風に数よりふゆる色

長き夜や妻に異なる時欲しき

待宵や六月の赤子泣きにけり(孫六ヶ月)

○ 浅木ノエ

赤子抱く夏負け知らぬ腕かな

遠花火湯じめりの髪束ねけり

かなかなの雨の夕べとなりにけり

鶏卵の確かなぬくみ芋嵐

暮るるまで根釣見てゐる背広かな

○ 齋藤晴夫

蓮開くなびけ古代の茜雲

台風一過雀鳴くさへいとほしや

空蟬の狭庭に過ぎし日数かな

文鎮の指に重たき敗戦日

鴉鳴く遠松風や夏の果

○ 西岡啓子

息かけてみがく鏡や今朝の秋

生きてると母宣ふやつくつくし

筑波嶺は目の高さなり秋日和

穂すすきに風の高さなり秋日和

釣瓶落しかがやきのこす雲の縁

春燈の句

安立 公彦選

一族の絶えたる墓地や草を刈る

茨城 山崎 刀水

新米の袋開けば息つけり

稲の花たまの旭日をろがむや
羽織るものむらさきが好き秋彼岸

物置となりし子の部屋夕月夜

親鸞の三帖和讀いわし雲

晩節に生くる糧あり敬老日

流灯のうしろは風の闇ばかり

ふるさとの蔵の白壁晩夏光

神奈川 長坂 正昭

下町の夏の去りゆく日影かな

どの田にも人のはたらく白露かな
立待月通院ながき看とりかな

木の間よりもれくる月を見てをりぬ

三重 上野 進

をちこちの目に入る街の灯みな涼し

被災地に吹く風もまた秋の風

愛知 後藤 大

幻聴に目覚むる夜半や野分立つ

見開きし眼哀れや捨案山子
虫の夜や映画に泣きし妻連れて

宗門を守りし寺や破蓮

バンコク 大口 堂遊

観音の天衣瓔珞秋深し

老鶯の声のもてなすリフトかな

埼玉 茂木 なつ

フラダンスの衣裳えらびや酔芙蓉

独り寝を唾ふが如き法師蟬
秋蟬に呼ばれ呼ばれて墓参り



余言

安立公彦

身の蔽の六蔽叩く白雨かな

上山 永晃

「身の蔽」は「心身」。「六蔽」は清浄な心をけがす六種の悪心。即ち、慳貧、破戒、瞋恚、懈怠、散乱、愚痴。これらは、生あるものの逃れ得ない心の傷である。

作者は沛然たる騒雨を目前に、その雷鳴を伴う白雨が、今まさにわが身の六蔽を叩き出しているのを感じるのだった。それは束の間の思い、というより願望だが、その願望はまた我が身に返ってくる思いでもある。「白雨」という季節の現象を、奥深い思惟と一体としたみごとな作品だ。

頬杖に重さありけり夜の秋

柴暗 富子

夜に入るといくらか過ごし易くなった晩夏のひととき、作者は思わず頬杖をついているわが身を振り返る。同時に「頬杖」というものに重さのあることを感じる。

頭の重さは背筋によって支えられているので、寝入りこ

まない限り、普通には重さは感じられない。しかし作者はその重さを確かに思ったのだ。ここにある「重さ」は、普通に言う軽重の謂ではない。考えごとは思いが深まると果てがない。これは「頬杖」に託した思考の重さである。

をりからの月や何から話さうか

近藤 牧男

今年の名月は、生憎の雲に遮られ無月に終わった。しかし心有る人はその無月に、名月の輝きを感じたことだろう。この句は、見る人によつてさまざまな情景を映しだす。その一つ、場所は郊外にある住まいの縁先。蚊遣火の香の立つ縁側で、作者は集まつて来た子供たちに語りかけている。折からの望月が子供らの顔を照らす。話すことは多い。子供たちも作者の話を待っている。過ぎ去つた昭和の日々、こういう景は良くあつた。懐かしい思いで、この句の前に停む人も多からう。この句にはその懐かしさを誘う表現の充実さが、それも然りげ無く語られている。

どの道も遠き日のまま秋桜

久米 憲子

作者はいま、久方ぶりに故郷の道を踏んでいる。かつての日々、よく歩いた道は、実際はそれなりに変わっているのだから、都会暮らしの作者には昔のままに映るのだった。

バス停の傍のコスモスも変わらず咲いている。ふと「遠き日のまま」という言葉が浮かんだ。作者は溜息をつくような思いで、そのコスモスの群落を見つめるのだった。

誰にも故郷はある。故郷は帰る人を大きく抱きとめてくれる。その思いが、よく「秋桜」に託されている。

Deng 熱 運ぶ 秋の蚊打ちにけり

秋場 貞枝

今年台風に伴う風水害に加えて、突如「Deng 熱」という災厄が降りかかった。それも都心の公園からだった。「Deng 熱」、このドイツ語の病名は、字面も読みもいかにも禍々しい。秋の彼岸に入って、その発生も幾らか弱まった様子だが、来年への媒介が今から気になる。

作者はその「Deng 熱」を逸速く俳句にとり上げた。俳人の姿勢として正解だ。「打ちにけり」の気合が良い。

迎火をこの世の風の揺らしけり

吉川 隆

門火の句を二句戴いた。その一句。門火は盞蘭盆会の際に、死者の靈魂を迎えまた送るために焚く火。多くの家では芋殻を焚くので芋殻火とも称することは、周知の事実。作者は盆の十三日の夕方、迎火を焚いている。盛夏の頃と異なり、夕暮れの時間は短くなった。その中で迎火はひととき赤く燃え上がる。それは現世の風の揺らぎであり、同時に、精霊を迎える安らぎの火明りでもある。「迎火」

という代々伝わる大事な風習を、良く表現した句だ。

仕事着のままに焚きゐる門火かな

矢口 笑子

いかにも生活感の溢れる句だ。「仕事着」がいい。どういう仕事着か。それは句を鑑賞する人が、それぞれに思い浮かべることである。以前聞いた折には、目黒区三田で店舗を開いているということだったが、今はどうだろうか。この「仕事着」を、私は勝手に「半纏」それも「紺の半纏」として鑑賞した。店の仕事有一段落した頃を見計らって、門火を焚く。目黒はサラリーマンの街である。客も多からう。紺の半纏姿の作者の凛々しい動きが、一句に表れている。盆供養の新しい感覚を詠みこんだ句である。

暮れ方のいつものメール夕化粧

藤原 若菜

この句の「夕化粧」は白粉花。江戸初期に渡来した外来種である。そう思いつつも、この句を見ると、何故か現代版光源氏を思い出す。「夕化粧」の故だ。

この「メール」は夫君から。今春長年のロンドン出張から本社に帰着と聞いた。それにしても若々しい句だ。こういう句を見ていると、見る当方も元気を貰う。同時発表の句に、〈枝豆や老後などまだ先のこと〉がある。一宜乎。詩、短歌、俳句を統括して、詩心は心の若さに宿る。